

## 館園だより

### ◆ 川 崎 ◆

#### 川崎市市民ミュージアム

博物館、美術館の機能をあわせもった複合文化施設として、「都市と人間」を基本テーマに博物館部門（考古、歴史、民俗）と美術館部門（美術・文芸、グラフィック、写真、漫画、映画、ビデオ）の相互が連携し、豊かな個性を持った活動を実施しています。

平成25年度には、文化・芸術を活かしたまちづくりを推進し、さらなる魅力向上を図っていくために、これまでの取組方針の成果等も踏まえつつ、改めて当館がめざす姿を、①市民ミュージアムの強みや川崎のポテンシャルを活かし全国に発信できるミュージアム、②市民に親しまれる川崎発の市民文化の伝承と創造の発信拠点としてのミュージアム、③生活にうるおいをもたらす、地域の活性化に貢献する拠点としてのミュージアムと定め、その実現に向けた取組を進めています。

平成28年度は、企画展として「生きるアート折元立身」（4月29日～7月3日）、『『描く！』マンガ展』（7月23日～9月25日）、「&がカタチをひらくとき」（8月4日～9月25日）「昔のくらしと道具2016」（8月6日～10月16日）、「旅する人びと」（10月8日～11月20日）、「2016川崎フロンタレ展」（12月17日～1月15日）、「第50回かわさき市美術展」（12月23日～1月14日）を開催いたしました。

なお、当館は平成29年度から指定管理者制度を導入し、新たな魅力ある空間として市民へのサービス向上を目指した取組を進めてまいります。各館園職員の皆さまの御来館を心よりお待ちしております。

#### 川崎市平和館

当館では、「平和とは、すべての人間が暴力や差別、貧困や環境破壊におびやかされず安心して生活できる」ことであるとの考えのもと、日本の過去の戦争、戦時中の川崎、現代の武力紛争、兵器、マスメディアと武力紛争の関わりなどの戦争についてはもちろん、国家による弾圧、武力は

伴っていないものの、私たちの平和的な生活をおびやかす、環境破壊、貧困、差別などについても、平和問題として展示しています。

包括的な平和への理解を促進し、啓発の場として、また市民の平和交流の場として、当館が幅広く利用されることを目指しています。

1階の屋内広場（平和の広場）では、川崎大空襲記録展（3月～5月）、親子平和推進事業（毎月）、原爆展・特別展（8月）、企画展・ミニ企画展（6、11、12、2月）を開催しています。

2階の常設展示は平成26年4月にリニューアルオープンしました。平和を包括的に捉えて発信していくという平和館のコンセプトは継承しながら、これまでの動画中心の展示から、説明パネルを中心にした展示に移行しています。これは、来館者が自分のペースで見ただけのことや、展示更新を柔軟にできること、東日本大震災以降の省エネの観点などを勘案したことによります。

また、音声ガイドを導入するなど、展示の方法をいろいろと工夫し、さまざまな平和問題をより分かりやすく、深く理解してもらえるような展示となっています。

#### 明治大学平和教育登戸研究所資料館

今年度は明治大学生田キャンパスと周辺地域（川崎市多摩区）に焦点を置き、登戸研究所の諸施設の変遷と地域社会の関わりについて解き明かした企画展『『登戸』再発見—建物と地域から追う登戸研究所—』（2016年11月16日～2017年3月25日）を開催しました。今回この企画展を開催したねらいは、明治大学在学学生や多摩区在住の人々が、自分達が普段何気なく生活をしている場所は、実は登戸研究所とつながっていると発見してもらうことでした。そのため、1960～80年代に撮影された生田キャンパスの風景写真を数十点まとめて展示するコーナーを設けました。生田キャンパスは1980年代頃まで、旧登戸研究所施設を教室や部室などとして使用していたため、これらの写真は普段の学校生活と登戸研究所を結び

付ける最適な資料だからです。展示の前でOBの皆さんが思い出話に花を咲かせる姿や、在学生在が「あ！ここ知ってる！」と会話をしているのを見かけ、こちらの想いが伝わっていると実感しました。

また、今回初の試みとして、キャンパス内に残る史跡を巡るスタンプラリー「登戸研究所の史跡探検！ラリー」を企画展と同時開催しました。ラリーを通じ、在在学生などが普段何気なく目にしているモノが、実は登戸研究所の史跡だったと気が付いてもらうことができました。

### 川崎市立日本民家園

当園は、東日本の代表的な古民家をはじめ、水車小屋、農村歌舞伎舞台など25件の文化財建造物を移築・復原し展示する野外博物館です。古民家のうち何棟かはボランティアスタッフが囲炉裏で火を焚いており、床上に上がって見学いただけます。また、古民家と昔の暮らしについて学べる常設展示・企画展示のほか、民俗芸能公演、昔話、体験講座など様々な催しも行っています。

今年度は企画展示として「ふしぎ古民具 大集合！－不思議な形には理由がある－」を7月1日から11月30日まで開催。当園が所蔵する、一見何に使ったか分からない、不思議な形の古民具を一挙公開し、謎解きをしながら昔の暮らしや道具について楽しく学べる展示を行いました。

また、来年度に開園50周年を迎えることから、記念企画展示を開催する準備として、本館展示室の改修と常設展示のリニューアルを行います。

古民家の旧所在地との交流事業としましては、富山県南砺市及び山梨県甲州市のほか、新たに福島市との交流事業を行い、金沢黒沼神社十二神楽の公演や土湯こけし作り実演などを開催しました。

その他にも年間を通じて様々な催しを開催しておりますので、ぜひ御来園ください。

### 川崎市青少年科学館

#### (かわさき宙(そら)と緑の科学館)

当館は2012年に通称名「かわさき宙と緑の科学館」としてリニューアルオープンし、プラネタリウムには世界最高水準の星空を投影するMEGASTAR-III FUSIONを導入、川崎の自然に係る動植物や地質に関する展示も内容を一新しています。

2016年度も展示や教育普及に係る各種事業を展開しました。

天文分野では、市内外の多くの小中学生が訪れるプラネタリウム学習投影のほか、乳幼児親子向けの「ベビー&キッズアワー」、プラネタリウム解説を半世紀以上続ける河原郁夫氏による「星空ゆうゆう散歩」など特色ある投影は高く評価されています。今年度はプラネタリウムでオーロラ写真家の作品上映を行い、好評を博しました。

自然分野では、当館のある生田緑地での各種自然観察会を開催するとともに、「子どものための」「初心者向け」と題した昆虫や植物の観察会も開催し、幅広い層を対象に自然に親しむ事業を実施しています。また、30年以上にわたる市民協働による自然環境調査の成果を紹介する報告会・シンポジウムを開催しました。

科学分野では、「実験工房」、「発明教室」「ふしぎ実験室」などの科学実験・体験教室のほか、大人向けの科学実験教室も開催するとともに、これらを支える人材育成として、科学サポーター養成講座も開催しました。また、科学実験キット「ワクワクドキドキ玉手箱」の学校出前事業など、学校理科教育との連携も図っています。

## ◆ 横 浜 ◆

### 横浜市歴史博物館

平成28年度に実施した企画展は次のとおりです。春季は、歴史を初めて学ぶ小学校6年生の学校見学に対応して、横浜市内の遺跡から見つかった考古資料を中心に紹介する「君も今日から考古学者！」(4/2～6/5)を、初夏には神奈川県立

歴史博物館が所蔵する浮世絵「丹波コレクション」を同館の協力のもとで紹介する「楽しい浮世絵ヒストリー」(6/18～7/10)を、夏季には横浜市内の小学校に設置された郷土資料室の整理・リニューアルをすすめている「博物館デビュー支援事業」のうち、これまでに整理が終わった各資料

室の成果から、地域の歴史や暮らしを物語る学校文化財を一堂に展示した「よみがえる学校の文化財」(7/23～9/4)を開催しました。秋季は、港北ニュータウンの埋蔵文化財撮影で活躍した写真家寿福滋氏が、長年にわたり追い続けた杉原千畝の「命のビザ」をテーマにした写真展「杉原千畝と命のビザ」(9/24～11/27)を開催しました。冬季には今年度新たに市の指定を受けた文化財を展示する「横浜市指定登録文化財展」(12/10～1/9)、また神奈川大学日本常民文化研究所と共同で企画展「和船と海運」を開催し、当館では和船による横浜と各地の交流の様相を江戸時代を中心に点描する「津々浦々 百千舟」(1/28～3/20)というテーマで展覧しました。

体験学習は新たに「れきし工房」としてリニューアルして実施しました。

このほか、好評の講座や横浜市内外の歴史探訪も、例年通り実施しています。

## 横浜美術館

### ■企画展

富士ゼロックス版2画コレクション×横浜美術館 複製技術と美術家たち—ピカソからウォーホルまで【会期：4月23日～6月5日】、メアリー・カサット展【会期：6月5日～9月11日】、BODY/PLAY/POLITICS【会期：10月1日～12月14日】、篠山紀信展 写真力 THE PEOPLE by KISHIN【会期：1月4日～2月28日】

### ■コレクション展

横浜美術館コレクション展2016第1期【会期：4月23日～6月5日、6月25日～9月11日】、同 第2期【会期：10月1日～12月14日】、同 第3期【会期：1月4日～2月28日】

### ■New Artist Picks

和田淳展 | 私の沼【会期2月3日～2月28日】

### ■美術情報センター

メアリー・カサット展連動企画 特別資料展示「パリ万博と紹介された日本」【会期：7月11日～9月28日】、BODY/PLAY/POLITICS展連動企画 関連資料コーナー「もっと知りたい！6人のアーティスト」【会期10月1日～12月28日】、BODY/PLAY/POLITICS展・篠山紀信「写真力」展連動企画 特別資料展示：『ピクチャー・ポスト』に見る「フォト・エッセイ」【会期10月1日～3月22日】、篠山紀信「写真力」展 関連資

料コーナー「篠山紀信の原点を探る—『アサヒカメラ』を中心に」【会期2017年1月4日～4月14日】

## 横浜みなと博物館

平成28年度の展覧会は8月から11月の会期で、横浜に住み、画家・イラストレーターとして船や海を描き続けた柳原良平の画業を通観する企画展「柳原良平 海と船と港のギャラリー」を、平成29年2月から4月の会期で海難救助の歴史と変化を紹介する企画展「海難と救助—信仰からSOSへ—」を開催しました。

教育普及事業では、企画展関連事業として記念座談会「柳原良平の海と船と港の絵を語ろう」や、横浜シティガイド協会との共催でガイドツアー「～柳原良平の描いた《海・船・港》を求めて～」、ワークショップ「柳原良平の海・船・港の絵本をつくろう」や「アンクル船長の絵を親子で探検しよう」を実施しました。また今年度から館長が横浜の港と船などについて話す「みなと博物館長トーク」、学芸員が常設展示をわかりやすく解説する「学芸員のワンポイント展示解説」、日本丸船長が帆船日本丸について解説する「日本丸船長による船の講座」を開始しました。横浜みなとキッズクラブは開始から6年目を迎え、新しく「モーターで動く船を作る工作教室」をプログラムに加えました。また土日の入館者向けに、毎週土曜日に「楽しい船の折り紙教室」、日曜日に日本丸などのペーパークラフトを製作する「ペーパークラフト教室」を実施しています。祝日は2つの教室を交互に実施しています。どの教室も入館者から大変喜ばれています。今後とも、横浜みなと博物館は帆船日本丸とともに、積極的に事業を行っていきます。

## 横浜国立野毛山動物園

本園は、昭和26年(1951年)4月に「野毛山遊園地」という名前で開園して以来、横浜の中心に位置する“身近な動物園”として、世代を超えて市民の皆さまに親しまれてきました。おかげさまで、平成26年度には32年ぶりに100万人以上の来園者数を記録しました。

平成28年(2016年)4月には65周年を迎え、記念式典の他に新しく野毛山動物園にやってきたミナミコアリクイ「アサヒ」のお披露目式を行い

ました。

飼育する動物は、約100種を数え、いずれも来園者に“身近に”動物を感じていただける展示となっており、“動物への理解を深めていただく入口”としての役割を担っております。中でも、「なかよし広場」では、モルモット、マウスなどの小動物とのふれあいを体験していただき、特に次世代を担う子どもたちが“動物のぬくもり”を実感できる場となっております。

60年以上の歴史の中で、数多くの希少種の繁殖に成功しています。現在も、より計画的な繁殖に取り組むことで、動物園の大きな役割である「種の保存」に努めており、平成27年には国内初であるヘサキリクガメの繁殖、平成28年9月にはチンパンジーの繁殖に成功しています。

また、神奈川県「野生傷病鳥獣保護事業」の委託を受け、野生動物の保護を行い、環境保全の一翼も担っております。

どうぞお気軽にご来園ください。そして、動物たちとの出会いをお楽しみください。

### 神奈川県立歴史博物館

神奈川県立歴史博物館は、適切な収蔵環境の維持と快適な展示環境の実現を目指して、空調設備等改修工事を行うこととなり、平成28年6月から全館休館することとなりました。休館前最後の特別展として『まぼろしの紙幣 横浜正金銀行券』を4月から5月に開催しました。その後、夏から秋にかけて収蔵資料の移転作業を行い、9月には県内の博物館、美術館、公文書館ならびに外部収蔵庫への資料移転を完了しました。博物館近くのビルに事務所機能を移転し、10月から業務を開始しました。

休館中の業務として、学芸員や外部講師による各種講座、多様な年代をターゲットにした体験教室、県内各所を舞台とした講義と現地見学会、学校へ出張講座など、充実した教育普及事業を開催しています。また工事中も見学可能な区域に限り建物見学会も継続し、重要文化財に指定されている横浜正金銀行本店本館の建築の魅力を発信しています。

休館中の当館資料の活用として、県立近代美術館（葉山）コレクション展「明治の美術」（4～5月）で近代絵画コレクションが、横浜市歴史博物館企画展「楽しい浮世絵ヒストリー」（6～7月）

で丹波コレクションが紹介されました。県立生命の星・地球博物館とは共催展「石展2 かながわの大地が生み出した石材」（12月～平成29年2月）を開催しました。

再開は平成30年4月下旬の予定です。約2年の休館の間、様々な準備を整え、再開後はより充実した博物館事業を展開したいと思います。どうぞご期待ください。

### 三溪園

2016年は開園110周年を迎えました。創設者・原三溪が新しい芸術を支援したこともあり、今年度は所蔵品展の他、現代美術をとりあげ、春には「北欧美術展」を古建築内で、冬には企画展「会所—三溪園の建物と花—エバレット・ブラウン湿板光画展」を三溪記念館で開催しました。庭園の整備は名勝整備委員会の指導のもと、植栽の整備に力をそそぎ、景観や建造物等の保存環境を改善しました。建造物の修理は横浜市指定有形文化財《白雲邸》の屋根修理や重要文化財《春草廬》の部分修理などを実施、内外ともに美しい姿となりました。ボランティアは、ガイド・庭園・合掌造りの3本立てで行っており、各々運営方法の見直し等に努めました。ボランティアの方々は建物周りの清掃や各行事への協力など、三溪園の管理や催事、来園者サービスへの大きな力となっています。また、他団体の三溪顕彰活動では、10月に三溪の出身地・岐阜で顕彰会の協力により、岐阜市歴史博物館の分室・三溪記念室が開室、他にも横浜の原三溪市民研究会などによる周知活動が盛んです。交通面では土日祝日に「ぶらり三溪園BUS」の運行で正門前までの交通が確保され、来園者の利便性が高まりました。開園後1世紀を過ぎて、ようやく近代文化遺産としての価値に理解が得られつつあるという状況であり、その維持保存への姿勢が一層問われることになり、今後も、長く親しまれる名所を守るため、職員一同努力してまいります。

### JICA横浜 海外移住資料館

当資料館では、日本から海外へ移住した日本人移住者の歴史・生活・体験や、世界各地に存在する日系社会の現在の様子などを展示しています。

たくさんの日本人が海を渡っていったここ横浜で、日本人の海外での発展と日系社会の形成や、

国内で働く日系人とその子弟について知ること、多文化共生社会について考えるきっかけとしていただければと願っています。

今年度は、リオデジャネイロオリンピック・パラリンピックを記念して、企画展示「二つのオリンピックスポーツがつないだ日系社会」を開催致しました。実際に使用された聖火トーチも寄贈頂き、多くの来館者が記念撮影をされました。現在は企画展示「鏡像の祖国－アルゼンチンの日系人たち」を10月15日～12月11日まで開催中です。また今冬には企画展示「ハワイの日系人のまつり－盆ダンスとお正月－（仮題）」を開催予定です。

毎年春には各都道府県からの海外移住に焦点を当てた展示を企画しており、沖縄移民展、一昨年度の和歌山移民展、昨年度の福岡移民展に続き、来年春には広島移民展の開催を予定しております。

また他にも公開講座、各種イベントなども随時開催していきます。

みなさまのご来館をお待ちしております。

## シルク博物館

当館では、絹の科学・技術の理解や絹服飾の工芸美の鑑賞の場として、年間を通してさまざまな事業を実施しています。

平成28年度は春の企画展として、「キモノの美－一人間国宝田島比呂子の友禅」(4/23～6/12)、秋の特別展として「第24回全国染織作品展」(10/8～11/13)を開催しました。その他、真綿の実演、スカーフ染め体験など、シルクにまつわる実演・講習会やワークショップを随時開催しました。

また、今年度より、当館の教育普及活動は「かいこ博士プロジェクト」として一括して取り組むこととし、小学校を中心に広報しました。プロジェクトの第1弾は蚕種（蚕の卵）配布（5/19～21）、第2弾は夏の企画「かいこ教室」（7/30～8/14）、第3弾は小学校向けの団体利用やワークショップ（通年）、第4弾は「たのしいかいこの発表会」（12/3～1/10）として、年間を通して子どもたちが蚕の生態や蚕が作る繭や生糸について学習する機会を作りました。

## 日本郵船歴史博物館・日本郵船氷川丸

日本郵船歴史博物館と日本郵船氷川丸は、ともに総合物流企業日本郵船株式会社が運営する施設です。

歴史博物館では社史を通じ近代日本海運の黎明期から現在の企業グループ活動を紹介する常設展と年3～4回の企画展を開催しています。昨年度は、収蔵品の船体模型に焦点を当てた「ザ・模型－NYK Model Ships－」（4月23日～7月10日）を開催し、あわせて講演会・ワークショップなど関連イベントで普段なじみのない船を身近に体験してもらうことができたと考えます。

また、氷川丸の重要文化財指定に伴い記念企画展として、氷川丸関連資料を紹介しながら竣工から86年を通観した「重要文化財指定記念 まるごと氷川丸展」（7月16日～12月25日）を開催しました。同展では各分野の識者にそれぞれの視点から講演いただき、氷川丸を再発見していただく機会となったと考えます。

一方、山下公園先（横浜市）に係留される日本郵船氷川丸は、1930年に横浜船渠（株）（現三菱重工業（株）横浜製作所）で建造された貨客船で、シアトル航路就航以来、いくつもの激動の時代を乗り越え、1960年に引退。2016年に洋上に浮かぶ船舶として初めて、重要文化財に指定されました。戦前の造船技術を伝える貴重な産業遺産として実物のもつ迫力は多くの方を魅了し、みなと横浜のシンボルとして親しまれています。2017年には、2008年4月のリニューアルオープン以来、250万人目のお客さまをお迎えする予定です。両館は徒歩15分ほどの距離にあります。ぜひご来館いただき、展示と実物の両方をご鑑賞ください。

## 横浜開港資料館

平成28年度の企画展については、第1回「ハマの大地を創る－吉田新田から近代都市へ」（2016年4月15日～7月18日）は、横浜の中心部が入り海から新田開発によって陸地化しさらに開港を起点に近代都市へと変貌していく過程を紹介した。第2回「明治のクールジャパン－横浜芝山漆器の世界・金子皓彦コレクションを中心に」（7月22日～10月23日）は、開港直後から輸出向けに横浜で製作されていた「横浜芝山漆器」にスポットをあてた。第3回「明治天皇、横濱へ－宮内省文

書が語る地域史」(10月28日～2017年1月29日)は、宮内公文書館との共催で、近代日本の国家的行事の舞台となった横浜における明治天皇の姿を取り上げた。第4回は「郷土史の昔と昔(仮称)」(2017年2月1日～4月23日)である。また季節や時宜にかなった資料を紹介するコーナー展示も随時開催した。

### 横浜人形の家

横浜人形の家は、平成28年度より指定管理者制度のもと丹青社・東急コミュニティー共同事業体が運営。「横浜発・世界の人形ふれあいクルーズ」をコンセプトに、収蔵品の中から地域色豊かな人形や人間国宝の手による貴重な人形まで多様な人形を展示。また、見て、触れて、感じて、遊ぶことが出来る新人形文化の発信にも独自の切り口から取り組んでいます。

今年度は「武者人形～人形師・永徳齋の技と美」(4/16～5/15)をはじめ、ウエディングをテーマにしたリカちゃん展「リカちゃんが夢見るウエディング Licca's Sweet Wedding」(4/26～7/10)、「ミニチュア・ドールハウス展」(6/28～8/31)、ロボットと人間の未来を考える「鉄腕アトム ロボットと暮らす未来展」(2016.7/16～9/25)、女性作家に注目した「Kawaii こけし展」(10/1～11/27)、15周年のプライスの集大成「Blythe 15th Anniversary Exhibition Sweet Celebration」(12/3～2017.1/22)、関節人形作家・清水真理の作品展「DOLLS FANTAGIC CIRCUS」(12/20～2017.2/12)、「ひな人形展～時を越えて～」(2017.1/28～3/3)、体験型展示「シルバニアファミリー展 わくわくミュージアム2017」(3/11～5/7)を開催。あわせて関連イベントや体験プログラムを行いました。

今後ともご指導、ご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

### 神奈川県立神奈川近代文学館

28年度は指定管理者制度の第3期の初年度にあたる。春の特別展「100年目に会う夏目漱石」では、代表作「道草」原稿の一部が約一世紀ぶりに発見され、初公開されたことが話題となり、単独の展覧会で歴代最高の入場者数29,430人(会期51日)を記録。順調なスタートを切ることが

できた。秋は27年度に資料の寄贈を受けた「第三の新人」の中心的作家・安岡章太郎を回顧した特別展「安岡章太郎展—〈私〉から〈歴史〉へ」を開催。また、中規模の企画展として、5月末から初夏にかけて戦後詩壇を代表する詩人・鮎川信夫の「没後 30年鮎川信夫と『荒地』展」を、夏に「絵本作家・西村繁男の世界展やこうれっしゃで出発!」を、29年1月末から春にかけて社会派小説の問題作を数多く発表した戦後派作家・井上光晴を回顧した「全身小説家・井上光晴展」を開催。さらに年度末から特別展「生誕 150年正岡子規展一病牀六尺の宇宙」の開催を予定している。また、文学展に関連した講演会、対談、朗読会、映画会などのイベントを多数開催したほか、文字・活字文化振興事業として文芸朗読会や連句会、児童向けの「かなぶんキッズクラブ」(読み聞かせ会、紙芝居、子ども映画会など)を実施した。県内図書館や中・高等学校図書室などへパネル文学展の巡回も行い、若年層の読書推進活動にも力を注いだ。さらに新企画の中・高校生限定文芸講演会や一般向け朗読教室を実施し、利用者層の拡大を図った。

### ニュースパーク(日本新聞博物館)

当館は常設展示を全面的に刷新して2016年7月、リニューアルオープンしました。現代の情報社会と新聞の役割を楽しく学ぶ施設として、体験型展示を増やし、主たるターゲットである子どもたちに分かりやすい展示を心がけました。

現在の情報社会に生きる子どもたちは、大量の情報に囲まれて暮らしており、情報を見極める力を身に着けることは大きな課題となっています。「情報の海」の展示ゾーンで急激な情報化を可視化し、情報との向き合い方を考えます。続く「真実を届ける」の展示ゾーンでは、確かな情報を届ける新聞社、新聞記者の仕事を紹介します。参加者がタブレット端末を手に横浜の歴史に迫る「横浜タイムトラベル」を導入してゲーム感覚で取材を体験してもらっています。小・中学校はじめ団体向けには「パソコンで新聞づくり」「新聞レクチャー」「取材クルーズ」という三つのプログラムを用意しています。体験と交流を通じて新聞について学ぶとともに、読解力や表現力の向上にも役立ててほしいと考えています。

リニューアル以降開催した企画展は「新聞が伝

えたスポーツと社会——オリンピック・パラリンピック報道展」(7月20日～9月25日)、「こんな時代があった 報道写真『昭和8年』展」(10月1日～12月25日、共同通信社との共催)、「2016年報道写真展」(1月7日～3月26日、東京写真記者協会との共催)です。

### 横浜都市発展記念館

横浜都市発展記念館は、現在の横浜市の骨格が形成された昭和戦前期を中心に、「都市形成の歴史」「市民生活の変遷」「横浜が育んだ文化」の三つのテーマから都市横浜のあゆみを紹介する施設です。

平成28年度は特別展・企画展として、4月16日から7月3日まで「横浜・山下公園—海辺に刻まれた街の記憶—」、10月22日から29年1月15日まで「焼け跡に手を差し伸べて—戦後復興と救済の軌跡—」を開催しました。それらにあわせて、「マリントワー開業55周年 ハマに展望塔ができるまで」などの写真パネル展も開催しました。また、収蔵資料を中心としたコーナー展(常設展示室内)のほか、ワークショップや体験学習も実施しました。調査研究員による「月イチ」講座も完全に定着し、リピーターが増えています。さらに毎年恒例の「夏祭り」「開館祭り」などとともに、にぎわいの創出をはかっています。市内の小学校4年生を対象に「吉田新田とその後の歴史」を解説する、学校団体向けのプログラムもたいへん好評で、毎年多数の利用校があります。

一方、横浜開港資料館および横浜市史資料室とは、戦後の都市横浜に関する連携研究事業や共同の地図データベース作成事業などを進め、調査研

究体制の充実に努めています。

### 神奈川県立金沢文庫

平成27年12月14日から28年3月18日まで休館し、空調設備の更新工事を実施しました。おかげさまで館内の温湿度は安定し、厳しい夏期も乗り越えました。さらに12月19日から29年2月上旬まで休館し、空調設備の制御盤の更新を行います。これで大規模な館内環境整備も一段落となりそうです。御心配をおかけしました。

金沢文庫に収蔵する「称名寺聖教」「金沢文庫文書」総計二万点余が、28年8月17日の告示で国宝となりました。県内でも半世紀ぶりの国宝指定だそうです。保存・修理をはかりつつ、分かりやすく展示・公開できるように学芸一同努力してまいります。

28年度は、再開第一弾として特別展「金沢百景」(3/19～5/29)を開催しました。昭和初期、失われつつあった金沢の風景を克明なスケッチに残した地元の画家・角田武夫の作品を一堂に公開し、昔を知る地元の方々に好評でした。続く企画展「泥亀永島家の面影」(6/3～7/31)では、江戸時代に金沢の新田開発を進めた永島家の古文書・遺品をまとめた形で初公開し、忘れられかけていた歴史の一コマに脚光をあてました。企画展「国宝でよみとく神仏のすがた」(8/5～10/2)では、国宝に指定された文化財と、珍しい美術作品のコラボを実現しました。特別展「忍性菩薩」(10/28～12/18)では、忍性の生誕800年を記念し、極楽寺を中心とする中世律宗の展開を多角的に展示しました。

## ◆ 三 浦 ◆

### 公益社団法人 観音崎自然博物館

特別展示(平成28年度分)

「江戸のタナゴ釣り文化とそれを支えた人々」

3月13日～5月15日

「ミヤコタナゴ写真展 生息地復元の試み」

5月20日～7月10日

「三浦半島の鳴く虫たち」7月15日～10月30日

「たねの世界 観音崎の植物とその種子」

11月13日～平成29年2月26日

人事について

10月24日に石鍋壽寛館長が病気のため亡くなりました。

変わって河野えり子主任研究員が館長に就任しました。

### 鎌倉・吉兆庵美術館

料理に合う器づくりにこだわった北大路魯山人。2015年から2016年は特に料理人としての観

点から魯山人を紹介した巡回展示が各地で催され、関心が高まった年でした。それは、2013年12月に「日本食」がユネスコ無形文化遺産に登録されて以来、美食家としての顔を持つ魯山人がメディアを通して紹介されてきたからでした。

鎌倉にゆかりのある北大路魯山人の作品を常設で展示している当館でもこうした背景を受け、魯山人と料理との接点やそのこだわりを普段の展示よりも多くご紹介しました。「器は料理の着物」といった魯山人が遺した名言と好んだ料理のパネル。そして、「花は足で（山野を歩いて、そこで摘んだ花を）生けよ」の言葉と山野草を生けた花器のパネルなど、作品だけの展示ではなく、言葉や写真から料理や生け花の世界を少しでも体現できるようにしました。

また、今年には備前焼作家、金重陶陽が生誕120年を迎えており、これを記念する展示を行いました。金重陶陽は明治から昭和にかけて活躍した陶工で、備前焼の分野で初めて人間国宝に認定されました。それまで彫刻のような細工を施した備前焼が主流だった時代に、本来の魅力である土と炎から生まれる窯変が美しい桃山風の備前焼を再興させ「備前焼中興の祖」としても知られています。当館では、陶陽の初期頃に見られる細工備前の香炉や桃山風備前の花器や水指を展示し、時代を追いながら変貌していったその作風の変化をご覧いただきました。

### 鎌倉国宝館

鎌倉国宝館は、大正12年の関東大震災を契機に、こうした災害から鎌倉の文化財を保護し、鎌倉を訪れる人々がこれらを容易に見学できる施設として、昭和3年に開館しました。今年、開館88周年を迎えた当館では、国宝・重要文化財をはじめとする貴重な収蔵品の数々をご覧いただくことができます。

本年度はまず、4月2日から14日にかけて、平成27年度に鎌倉市新指定文化財となった作品を展示し、4月23日から5月29日にかけては、總持寺の名宝を中心とした特別展「禪の心とかたち～總持寺の至宝～」を開催しました。6月7日から7月18日にかけては、公益財団法人常盤山文庫との共催で、同文庫収集の墨蹟を中心とした「常盤山文庫名品展2016」を開催しました。また、7月23日から9月4日にかけては、仏像の見方をわか

りやすく解説した「仏像入門～ミホトケをヒモトケ！～」を、9月9日から10月16日の「国宝 鶴岡八幡宮古神宝」では、鶴岡八幡宮に伝わる古神宝類や社宝を展示しました。さらに、本年鎌倉で行われた東大寺サミットにあわせて、10月22日から12月4日までの間、鎌倉とゆかりの深い東大寺に関連する資料を展示する「鎌倉meets東大寺—武家の古都と南都をつなぐ悠久の絆—」を開催しました。1月4日から2月5日にかけては、公益財団法人氏家浮世絵コレクション展「肉筆浮世絵の美—氏家浮世絵コレクション—」を開催し、2月11日から3月12日まで「ひな人形」を開催しました。

### 観音ミュージアム

平成26年4月より長期休館に入った当館は、去る平成27年10月18日、装いを一新し、名称も「観音ミュージアム」と改めリニューアルオープンいたしました。

本改修の主目的は、開館から35年が経過し、老朽化した施設の耐震化や設備の刷新でありましたが、それとともに、鎌倉長谷寺が博物館施設を設置・運営するうえで「本尊である十一面観音菩薩について、興味や関心、そして理解を深めていただけるような施設造りを目指す」という趣意を来館者にも明確に伝えるため、展示方法の全面的な見直しを図った次第であります。

具体的な取り組みとして、映像による当山やミュージアムの紹介をはじめ、主要展示資料の詳細な解説を行うためのデジタルキャプション、あるいは、本尊をあらゆる方向から見る事ができるパノラマ画像を駆使したコンテンツなど、時代性に即した親しみやすい演出と、より深い探究心を持った方にも満足していただける補助解説機器の導入で、来館者のニーズに幅広く対応できるよう努めました。

また、1階展示室の増床に伴い、常設資料の展示演出にも力を入れ、当山伝世の資料群でも特異な存在である「木造観音三十三応現身立像」（鎌倉市指定文化財）や「銅造十一面観音懸仏」（国指定重要文化財）は、それぞれ専用の展示ケースを製作し、その希少性や特殊性を際立たせることで当ミュージアムを代表する文化財として紹介ができるようになったと自負しております。

なお、常設展示を中心とする運営方針に切り替



えたことで、企画展示のコーナーは縮小せざるを得なくなりましたが、昨年のオープンより所蔵資料によるリニューアルオープン展（彫刻・絵画資料）をはじめ、昨夏には「カワイイKawaiiほとけさま」展の開催など、仏教美術品をより親しみやすい形でご紹介する企画も随時開催を予定しております。

寺院系博物館の新たな姿を模索し、「宝物館」から「ミュージアム」に生まれ変わった当館へぜひお運び下さい。

### 神奈川県立フラワーセンター大船植物園

平成28年度は、毎年ご好評をいただいている「ハスの花観賞のための早朝開園」を7月16日、17日、18日及び23日、24日の5日間にわたって開催しました。午前7時に開園し、早朝に咲くハスの花を多くの方にご覧いただきました。10月28日から11月23日までは神奈川県菊花連盟との共催により、県内各地の愛好家が仕立てた菊を展示する「第54回神奈川県菊花大会」を、また11月12日、13日には楽しい企画が満載の「第20回フラワーフェスティバルおおふな」を開催しました。そのほか、年間を通じて植物愛好団体の協力による季節感ある展示会も開催しています。園内の花壇は、四季を通して花が楽しめるよう工夫しており、観賞温室では熱帯の植物を通年ご覧いただけます。人気が高い「ばら」や、本園で改良・育成してきた「しゃくやく」、「はなしょうぶ」なども季節ごとにお楽しみいただけます。年間を通して寄せ植え教室や植物の栽培教室など各種講座を開催し、夏休みには小学生向けの「親子で楽しむフラワーアレンジメント教室」などを企画しました。園芸に関する相談については専任相談員が

県内一円から幅広い相談を受けております。

なお、平成30年4月には指定管理者による管理への移行が予定されておりますが、今後もお客様に喜んでいただけるよう職員一同取り組んで参ります。

### 横須賀市自然・人文博物館

平成28年3月12日（土）～6月5日（日）まで企画展示「土・石・木・器のかたち－いれものからみる横須賀の歴史－」を開催しました。横須賀市内で出土・収集された様々な器を展示しました。

平成28年7月16日（土）～9月25日（日）に特別展示「天神島大冒険！－海とともにくらす生き物たちの楽園－」を開催しました。博物館付属の天神島臨海自然教育園が2016（平成28）年に50周年を迎えたことを記念して、天神島の自然とその保全の歴史、おすすめの観察ポイントなどを展示しました。

平成28年10月29日（土）～平成29年2月5日（日）に企画展示「横須賀の古墳時代－古墳はだれがつくったか－」を開催しました。古墳と横穴墓を中心に、横須賀市内の遺跡から出土した古墳時代の遺物を展示しました。

平成29年3月11日（土）から企画展示「横須賀製鉄所の同窓生」を開催しています。平成29年6月4日（日）まで、横須賀製鉄所が作った学校である「巖舎（こうしゃ）」の人びとの写真や演習図面を展示しています。

今後も本館をはじめ、馬堀および天神島の自然教育園、ヴェルニー記念館において、横須賀や三浦半島の自然および人のいとなみについて研究し、分かりやすく発信していきます。

## ◆ 湘 南 ◆

### 茅ヶ崎市文化資料館

文化資料館では、平成28年2月に策定した「文化資料館整備基本計画」を策定し、平成33年度の（仮称）茅ヶ崎市博物館の開館に向け、建物及び展示・収蔵の設計に取り組んでいます。

その間、現資料館では、海岸地域の動植物の分布調査、市内の石造物の記録調査や、自然観察会や文化財探訪、小学生の向けのワークショップな

どの教育普及事業を、市民ボランティアと協力して開催しております。

28年度は、寒川町文書館と共同開催した共催展「寒川と茅ヶ崎の大山道」を7月に開催し、多くの来館者を得ることができました。

また、神奈川県建築士会（湘南支部）と東海大学工学部建築学科の小沢朝江研究室と協定を結び、幕末期に建てられた市指定重要文化財である

旧和田家及び旧三橋家について、保存と活用の検証を行いました。旧和田家については、現況調査を行い、今後の望ましい保存方法の検討を行いました。旧三橋家の普請等について研究を行い、建てられた当時の状況について明らかにすることができました。また、今後の活用を検討するにあたり、ミニ企画展の開催、保全と文化財に親しむことを目的とした障子の張り替えなどのワークショップを開催しました。

今後は、(仮称)茅ヶ崎市博物館の開館に向けて設計や移転に向けた準備を進め、これまでの活動で育ててきたものを、継承し発展させるべく、地域の博物館としての新たな活動に向けた準備を進めて参ります。

### 平塚市博物館

当館は2016年5月1日で開館40年を迎えました。多くのサークル活動をはじめ市民とともに歩んだ40年です。

これを記念して7月16日～9月11日に、夏期特別展『レンズが見たひらつか2 1976-2016』を開催し、開館以来40年の平塚市と博物館のあゆみを写真で伝えました。地域博物館として過去を探るだけでなく、未来を見据えて今を記録する視点も大切にしたいと思います。

10月22日～12月18日には秋期特別展『知られざる平塚のロケット開発』を開催しました。当館が建っている場所は戦前には海軍火薬廠があり、そのなかで現代の日本のロケット技術が萌芽していたこと、市内の企業や大学でのロケット技術や開発を紹介しました。

2017年2月25日～5月7日には春期特別展『男の子と女の子のお雛さま』を開催します。当館に寄贈された節句人形を紹介し、人形と節句行事への理解を深めていきます。

プラネタリウムも「すだれ越しに見た宇宙」「フリー・トーク・プラネタリウム」「賢治が綴った星空」「不思議な星と悪魔の星」「2017年の天文現象」「ペピ・コロンの彗星探査」などの番組を投影しました。そのほか、考古・民俗・歴史・生物・地質・天文の各分野の講座や体験学習、観察会を実施し、市民の多様なニーズに応えられるよう努めています。

また、2016年から当館ホームページをリニューアルしました。当館の活動や出来事をリアルタイ

ムでお伝えするブログも始めました。ぜひご覧ください。

### 大磯町郷土資料館

昭和63(1988)年10月に開館した大磯町郷土資料館は本年度11月3日付けでリニューアルオープンいたしました。郷土資料館リニューアルオープンに際しましては、「湘南の丘陵と海」という館のテーマにもとづき、28年間の博物館活動を生かした常設展示の構成といたしました。とりわけ、「別荘地 大磯」にかかわる近代史・現代史に重点を置いています。

企画展示は、郷土資料館巡回展として「海の中の植物・海藻～いろいろな色 いろいろな形～」を5月28日～6月26日に開催し、「大磯の災害パネル展」を9月17日～10月16日まで開催しました。オープン記念企画展として「遺跡からみる近代別荘地の形成と展開」を11月3日～12月18日に開催。平成29年1月21日から2月26日まで神奈川県教育委員会主催による巡回展「かながわの最初の現代人―旧石器時代のヒトと社会―」を開催しました。3月26日から5月7日は企画展「吉田茂」を開催しております。

また、ワークショップは従来「大磯自然観察会」、「海の森クラブ」、「古文書裏打クラブ」、「古文書解説クラブ」の活動しておりましたが、今年度、新たに「写真整理クラブ」の活動を開始いたしました。

皆様のご来館をお待ちしています。

### 秦野市立桜土手古墳展示館

当館は、丹沢山系の麓、秦野盆地に遺されていた桜土手古墳群を保存・復原した遺跡公園(桜土手古墳公園)とともに、古墳群からの出土品を中心に展示した野外・館内とが一体となった博物館です。

今年度は、特別展として春季は歴史を学び始めた小学生を対象に秦野市内の遺跡から見つかった考古資料を時代別に展示した「秦野の歴史2016」(4/19～6/26)、秋季は神奈川県西部の新東名関連の発掘調査成果を公開した「遺跡・遺物が語る! かながわ・秦野の歴史2016」(10/4～11/27)((公財)かながわ考古学財団共催)を開催しました。また企画展として、新設された「山の日」を記念して、大正から昭和にかけての丹沢

登山の記録写真や当時の登山雑誌・用具を展示した、はだの史・発見展「丹沢登山昔むかし—大正から昭和30年代」(7/21~8/28)、秦野市指定文化財特別公開として「ニホンオオカミの頭骨」展示会(10/28~11/3)を開催しました。

講演プログラムとして考古学・歴史・民俗を題材とした「ミュージアムさくら塾」を全6回、体験プログラムとして遺跡見学会「ミュージア

ム青空レクチャー」を全4回、夏休み子供向けに「ミュージアムさくら工房・親子まが玉作り教室」を開催、いずれも好評を博することができました。

引き続き、来館者の皆様の古代へのロマンと探究心を掻き立てるような学習の場、憩いの場を提供していきたいと考えています。

## ◆ 西 湘 ◆

### 小田原市郷土文化館

当館では、郷土の豊かな自然や歴史に関する豊富な郷土資料の調査研究・収集・保管・展示等とともに、郷土文化の普及向上に資する各種事業を行っています。平成27年1月20日には開館から60周年を迎えました。

本年度は、本館(小田原城址公園内)と市立かもめ図書館において、小田原映画祭開催10回目の節目にあたる機会に、特別展「小田原が生んだ映画の世界」を実施し、市民が所有する資料や写真も含め、小田原に関係する映画や映画人、市内にあった映画館等を紹介しました。分館松永記念館(板橋)においては、設立者・松永安左エ門(耳庵)の事績を紹介する、常設展「松永耳庵と老櫓荘」のほか、昨年度改修を行った別館展示室にて「収蔵市指定文化財展」などを実施しました。

そのほかにも地域のかたがたと協働で行う事業の実施や、特別展に関連した講座、野外観察会、史跡等の散策、縄文時代や和の文化を体験する普及事業などを実施し、小田原の歴史・文化の発信に努めています。是非ご来館ください。

### 神奈川県立生命の星・地球博物館

当博物館は、地球と生命・自然と人間がともに生きることをテーマに活動している自然史博物館です。46億年にわたる地球全体の過去から現在までの、そして神奈川を中心に自然に関する幅広い資料の収集・保管と次世代への継承、調査・研究活動を基盤とした展示活動や学習支援活動の展開により、人々の心に自然に対する愛着と感動を呼び起こすことを目指して活動しています。

平成28年度は、当館所蔵の鉱物コレクション

を扱った特別展「Minerals in the Earth—大地からの贈り物—」(7/16~11/6)、昨年度県立歴史博物館で開催した「石展」をアレンジした企画展「石展2」(12/17~2/26)を開催しました。「石展」は、県立歴史博物館と当館との初共催により、考古、歴史、民俗、岩石、地質等の多角的な視点で「石」を紹介する企画の実現となりました。その他の企画展示として、児童・生徒による研究作品(自由研究など)を展示する「子ども自然科学作品展」(3/19~5/8)を開催しました。

### 彫刻の森美術館

当館は、自然と彫刻の調和をめざし、1969年にフジサンケイグループによって創設された国内初の野外美術館です。およそ7万㎡の広大な庭園は季節や天候により様々な表情を見せ、ロダン、ムーアなど近現代を代表する国内外の巨匠の作品120点余りを散策気分で鑑賞できます。

本年度の企画展として、「篠山紀信写真展 KISHIN meets ART」を2017年4月5日まで開催しています。1950年代後半から今日まで、第一線を走り続ける写真家・篠山紀信はヌードや都市風景、スターたちのポートレイトなどの写真を次々と発表してきました。

その篠山が選んだ本展覧会のテーマは、ずばり「アート」。今回は、2つの会場で篠山とアートの出会いの瞬間を公開しています。

本館ギャラリーでは、篠山が新たに撮り下ろした当館コレクションのヘンリー・ムーアやカール・ミレス、ジュリアーノ・ヴァンジなど、野外彫刻の迫力ある写真をご覧ください。

もう1つの会場、緑陰ギャラリーでは、篠山が交流を重ねてきたアーティストやその仕事場の写

真を、複数台のカメラを結合して撮影する「シノラマ」でとらえた写真を中心にご覧いただけます。

篠山とアートとの出会いを切り取った瞬間 = “KISHIN meets ART” をお楽しみください。

各館園職員の皆様のご来館を心よりお待ちしております。

### 箱根写真美術館

当館は箱根出身、在住の写真家・遠藤桂の富士山作品を常設する個人立美術館として2002年に開館致しました。箱根は、昨年より箱根山火山活動が活発化し観光客数が激減していましたが、警戒レベルの引き下げ、箱根ロープウェイの再開を受け、活気が戻って参りました。一安心しているところではありますが、今後も災害に対する意識を高く持ち、作品の保全、災害時の備えを継続していきたいと思っております。

今年度の事業は当館所蔵の作品を中心に企画展を構成した他、協力作家の作品展を開催しました(8-10月トシ・ワカバヤシ Tin Toy Dioramas Photography、10-12月海野貴典写真展 秋彩)。

普及活動では『箱根PHOTOさんぽ』と題して季節毎の写真教室を実施、今年度は箱根山内の様々な施設を訪れ、専門スタッフや学芸員の方から説明を受けながら撮影をさせていただきました。また、教室参加者による作品展「はじめてのいっぽ展2016」を東京銀座にて開催致しました。

現在は、来年迎える開館15周年企画展の準備を進めています。これまでの15年を礎に当館固有の特色を活かし、作家によるギャラリートークなど対話形式の活動を強化していきたいと考えております。

### 箱根町立郷土資料館

当館では、湯治場として知られた箱根が江戸時代頃を境に現在の温泉観光地へと移り変わっていく様子を、温泉開発などを絡めて紹介しています。

体験コーナーでは、ミニチュアのわらじが作れる「ミニわらじを作ろう」コーナーやからくりパズルや秘密箱が体験できる「からくり細工」体験コーナー、塗り絵で明治時代の彩色写真を疑似体験できる「彩色写真にチャレンジ!」コーナーを常設しています。

28年度の行事では、「夏休み体験広場」を開催し、入館者に現代の日常生活では体験できない、歴史の疑似体験してもらうことを目的として、実際にわらじを作ったほか、昔の道具に触れたり、火おこしや拓本の体験などのワークショップを7月から8月の毎週火・日曜日におこないました。また、1月には毎年開催している「お正月を楽しむ会」を開催し、箱根特有のおもちの入った七草がゆ作りの実演・実食、百人一首やすごろく等正月遊びを行いました。

企画展としては、昭和31年9月30日に5か町村が合併して箱根町が誕生してから60周年を記念して、これまでの町のあゆみを写真パネルでふり返るとともに、町民から提供された写真や資料を展示する「写真で振り返る箱根町の60年」を9月～11月に開催しました。当館では、毎年秋ごろに企画展を開催しております。箱根にお越しの際は、ぜひ当館にお立ち寄りください。

### 報徳博物館

当館に事務局を置く国際二宮尊徳思想学会の第7回大会が2016年8月24・25日、明治大学駿河台キャンパスで開催されました。「『地域活成』と報徳一近世・近現代の諸相と課題」をテーマに基調講演が2本、研究報告が日本側19本、中国側8本という過密なスケジュールに加え、シンポジウム「近世の遺産を近現代にいかにつなぐか」も行われました。

盛り沢山の内容とともに、会場が交通の便に恵まれていたこともあって、一般の参加者も多く、盛況裡に日程を終えることができました。次回の大会は2018年に、孔子の故郷である中国山東省の曲阜で開く予定です。

さて、当館では8月を除く毎月第3日曜日に「古文書に親しむ会」を開催しています。1991年4月の初回以来、2017年3月で280回を数えます。現在は2人の職員が月毎に交代で講師をつとめており、テキストの選択にも、それぞれの特色が見られます。本年度は、尊徳の伝記として著名な富田高慶の『報徳記』の原稿や、尊徳の門人で観光地箱根の近代化にも尽くした福住正兄の手になる『群書類従』の写本、福住家に伝来した江戸時代の版本『庭訓往来』などをテキストに使用しました。受講者数は毎回10名前後ですが、皆さん非常に熱心で、講師役の職員も手を抜くことができ

ません。

### 小田原城天守閣

当館は、昭和35年に市制20周年を記念して、総工費8,000万円をかけて復興された、小田原市のシンボルともいえる施設です。復興に際しては、江戸時代に作られた模型や引図（設計図）などを参考に、当時の姿が外観復元されました。平成26年度には約50万人のお客様をお迎えするとともに、平成27年には累計入場者数2,500万人を達成しています。

小田原市では、平成21年に「小田原市耐震改修促進計画」を策定し、その中で「市内の特定建築物の耐震化率を100%にすること」を目標に掲げました。これに伴い、当館は耐震改修を行う施設と位置づけられたため、平成27年7月から平成28年4月まで、「平成の大改修」として耐震改修および展示改修工事を行い、5月1日にリニューアルオープンしました。

展示リニューアルでは、1階で江戸時代の小田原城、2階で小田原北条氏の歴史を紹介するなど、ストーリー性を明確に打ち出しました。また、北条家ゆかりの武具を新規に収蔵・展示するなど、展示品の充実も図っています。更に、最新の研究成果を活かし、江戸時代の天守最上階にあったとされる摩利支天像の安置空間を一部再現しました。再現に際しては小田原産の木材を使い、小田原の木工職人が施工するなど、小田原の木に関わる人々が結集しました。

リニューアル後は前年度比で約2倍にあたる35万人のお客様にご来場いただいております（9月15日時点）。生まれ変わった小田原城に、ぜひお越しください。

### 町立湯河原美術館

展覧会事業では、公益財団法人梅若研能会の協力のもと、貴重な所蔵品の中から能面や装束等を展示し、能の魅力とともに日本の伝統美の世界を紹介する特別展「幽玄の美～能面と装束展」（10/7～11/15）を開催しました。平松礼二館では、「さくら咲くジャポン」（3/31～6/27）、「10周年プロローグ～寄贈作品セレクト展」（6/30～10/4）、平松館開館10周年記念特別展「琳派モダン～平松礼二展」（H29.3/2～6/26）の他、秋・冬の季節に合わせた展示（10/7～11/15、11/17～H29.2/27）の計5回の企画展を開催しました。常設館では、竹内栖鳳、安井曾太郎、三宅克己等湯河原にゆかりある作品を中心に20点前後を展示しています。さらに、収蔵品小企画展として、日常や風景を引き立てる「光の存在」をテーマにした展覧会「ヒカリウム～陰陽の中で」を開催しました。また、地元作家を中心とした第10回「現代作家展」（3/31～6/27）を開催し、「麻賀進写真展」「はっ・とび展V」「新山拓日本画展」の3組の作家を紹介しました。

学校との連携事業として、吉浜小学校6年生を対象に「平松礼二先生による課外授業」を平成29年1月27日に実施し、事前学習として美術館鑑賞教室を行いました。

その他の事業として、夏休みに子供向けのワークショップや美術館探検、クイズラリーなどを開催し、期間中、小・中学生の観覧料を無料としました。また、四季折々の景色を楽しむことができる庭園では、「もみじライトアップ」を11/26～12/4に開催しました。

## ◆ 県 央 ◆

### 海老名市立郷土資料館・海老名市温故館

夏の企画展を平成28年8月8日から9月30日まで開催し、近年多発している「震災」について取上げました。海老名市内だけでなく県内の発掘調査で確認された痕跡や、今も大地に残る地形などを主に写真を用いて紹介しました。

10月16日には目の前に広がる相模国分寺跡で、2回目となる「相模国分寺むかしまつり」が開催

され、昔遊びや出土遺物を用いたバッチ作り、舞台発表などともに、温故館では民具体験や顔出しパネルを設置し、多くの家族連れでにぎわいました。

秋の企画展は、平成28年10月25日から12月25日まで開催しました。本年度は、海老名市市制施行45周年に当たることから「海老名ノスタルジア」と題し、当時の街並みや生活がわかる写

真や資料を展示し、昭和30年代に市内で撮影された貴重な教育映画である「おかあさんのしごと」を上映しました。

年明けの平成29年1月9日から2月5日まで、「海老名郷土かるた」製作40周年記念収蔵品展「郷土かるたのいろいろ」を開催し、当時製作にあたって集めた各地のかるたや原画などを展示しました。

### 厚木市郷土資料館

当館は、地域の自然、歴史、民俗資料を収集・保管し、展示などに活用することで郷土に対する興味、理解を深める“あつぎ百科”であることを標榜し、活動してきました。まもなく開館20年となりますので、今年はその成果を示す「まとめ」となるような展示、講座の事業を計画しました。

まず、①収蔵資料展「“あつぎ百科”物語1—歴史・文化編—」（6～8月）、その続編として②収蔵資料展「“あつぎ百科”物語2—自然編—」（9～10月）を開催し、会期中には③「“あつぎ百科”物語」関連講座（7～10月、4回）を実施いたしました。

続いて④特別展「あつぎと酒～酒の飲みよりの移り変わり～」（11月20日～29年1月15日）を実施し、⑤「あつぎの化石」（1～2月）、恒例の⑥「あつぎの遺跡展」（3月）を予定しています（⑤、⑥は仮タイトル）。

④特別展「あつぎと酒」では、酒がどのように「造られ」、「飲まれ」てきたのか、資料館所蔵の古典籍、絵画、民俗資料などから紹介いたします。

展示以外の普及活動としては、「古文書講座」「あつぎの自然を歩く」「石造物講座」「自然教室」などの講座を継続して実施するほか、「古文書解読会」「石造物の会」「伝えよう！わらべうた遊び」など市民団体との共催講座も積極的に行っています。

### 相模川ふれあい科学館 アクアリウムさがみはら

「コラボレーションで広がりのある展示や活動を展開」

明治20年に日本初の近代水道である横浜水道の水源となったことに始まり、現在でも神奈川県内の生活用水の60%をその水系から取水して

いる「相模川」。そのほかにも、数多くの発電所が建設され京浜地区の工業化に大きく寄与するなど、私たちの生活と密接な関係を持ちながら、今なおその流域には豊かな自然環境が残り、特に最近では生物多様性など、直面している地球環境問題を考える身近なフィールドとして注目を集めています。

平成26年3月のリニューアルオープン以降、当館は主にこの環境問題を発信し訴求する拠点となるべく、「川・生命・人のつながり」というコンセプトのもとで様々な活動に従事し、平成26年度は19万人強、27年度は19万5千人強のご来館者にお越しいただきました。

今年度は、今まで以上に多くの施設や団体とのコラボレーションにより、限られたハードやソフトを超越してwin-winの関係を重視した相乗効果を生むことに注力しました。たとえば、県内で唯一の展示施設として、前年度死亡したオオサンショウウオを岐阜県にあります「世界淡水魚園水族館アクア・トトぎふ」より貸与を受け展示を再開し、また「神奈川県水産技術センター内水面試験場」の最新の研究成果を2ヶ月ごとにテーマを変えてご紹介するコーナーを常設エリアに設けるなど、常設展示でも新鮮さを保つ成果を得ることができました。イベントとしても、麻溝公園ふれあい動物広場との生体の相互交換展示を行う、また桜美林大学のサークルを招聘して特別企画展のテーマにあわせてエイサーの演舞を披露するなど、特に当館近郊の施設や団体を中心に分野の違いなどの垣根を越えた協力体制を構築することもできました。

そしてこのような協力体制の構築が、今までは環境問題に関心が薄かった方にも訴求する貴重なチャンスとなり、またその交流がもとになって新しい出会いや発見が生まれるという、当初は予想し得なかった成果をも得ることができた、そんな年度となりました。

### 相模原市立博物館

平成28年度は開館してから21年目を迎え、入館者は開館以来270万人を超えました。

企画展示として「鳥の羽根 温かく、美しくまとうもの」、「JAXA×博物館 宇宙とつながる写真展」、「学芸員のタマゴがつくった展示」、「学習資料展 大地さんと未来さんが見つけるちょっと

昔の暮らし]、「相模原の遺跡2017」のほか、常設展示室内に養蚕や勝坂遺跡発見90周年記念事業に関するミニ展示を行いました。

また、「今夜の星空を見上げてみよう～星空観望会～」、「民俗探訪会」、「生きものだいすきミニサロン」など、各分野の事業を実施してきました。このほか、当館が推進している「宇宙教育普及事業」の一環として天文分野の講演会等を開催する「さがみはら宇宙の日」は、奇数月には折々のテーマで講演会等を、偶数月には恒例となった「はやぶさ2トークライブ」を開催し、それぞれ毎回好評を博しています。なかでも11月にはJAXAを始め、新聞社や大学、地域等と連携した「宇宙フェスタさがみはら2016」を開催し、トークバトルやコンサートなど、延べ1200名の参加者を得ました。

所管施設である尾崎罌堂記念館では、市民協働事業として巡回展や罌堂ゆかりの地バスツアー等を、吉野宿ふじやでは企画展示のほか、蚕の飼育や、まゆ人形作りのワークショップを開催するなど、施設の活性化を図っています。

平成29年度も企画展や各種事業を開催し、市内外へ魅力を発信していきます。また『相模原市史続編 別編』及び『津久井町史 文化遺産編』の刊行も予定しています。

### 大和市つる舞の里歴史資料館

当館は、大和市北部地域の歴史を紐解く資料を中心に、収蔵・展示しております。

今年度の企画展では、「鉄道と駅とわたしたちの100年」と題して、鉄道と駅の開業やその変遷をとおして、市域の近代化の様相やまちと市民生活の変化などを紹介しました。鉄道開業に尽力した地元住民の情熱や、神中鉄道（現相模鉄道）、小田原急行鉄道（現小田急線）の開通によって誕生した市内各駅が紡いだドラマ、現在では文化として浸透した鉄道趣味や子供の心をとらえた鉄道玩具などにもスポットをあてました。

常設展示では、旧石器時代から縄文時代草創期の長堀遺跡出土の石器や土器などの展示のほか、古墳時代後期の浅間神社西側横穴墓群から出土した副葬品の鳴鏑、下鶴間城山遺跡からほぼ完全な形で出土した室町時代の茶臼など全国的にも珍しい遺物を展示しています。また、江戸時代に大山詣の人々が利用した矢倉沢往還（大山街道）の宿場町「下鶴間宿」、近代の小田急線開業と同時に進められた都市開発「林間都市計画」を紹介しています。

そのほか毎月第四土曜日の午後には、ミニ講座「つるまい土曜講座」を開催し、市域の歴史と文化財について新たな発見をしていただけるように努めております。